



1977-1983

10年ぶりの県大会優勝



後列(左より)佃先生、ヒルケルさん、志田(早大→日興証券)、中嶋(一橋大→住友銀行)、榊原(慶大→三菱化成)、広瀬(神大)、大谷(神大→日本火災海上)、吉本(一橋)、松永(関大→梅彦<家業>)、市川先生。前列(同)新田(阪大→伊藤忠)、堀江(大阪市大→ユニチカ→大阪市大)、平井(慶大→太陽生命)、堤(早大→検察庁)、加藤(神大)、見田(姫路工大)、藤岡(九大→大成建設)。

なかなか真面目な サッカー部

ある40期生(野球部、体育祭委員長)はわれわれ40期サッカー部を評して卒業記念文集につぎのように書いている。

「みんなはサッカー部の者は真面目でええやつが多いといっているが、こいつらもええかげん不良である。というのは、堀江(主将)、堤(国体優勝、エピソード2参照)、松永というサッカー部の代表といえる3人は、共にパーマをかけているのだ。松永なんかひどい髪を火で焼いたんとちゃうか、堤

は眉を剃っとるし、もう耐えられへんわ。堀江は、笑って『天パヤ』と言ってごまかすし、サッカー部のやつが真面目やなんておもったらあかん。まあ冗談はさておき…やっぱり強い部だけあって、メンバーそれぞれ見ても、ええ顔(ハンサムというのでは決してないぞ!!喜ぶな堤)をしていたようだ。体育祭でもよく頑張ってくれたし、やはりすごいですね、佃先生」

そこで、われわれのプロフィールを具体的に紹介したいが、やはりいまでも一番の思い出になっているのは高2の時の県新人戦優勝である。まず大会の経過をしるすと以下のとおりである(ただし県大会2回戦以降)。

- 2回戦 六甲7-0 豊岡
- 3回戦 六甲3-1 西脇工業
- 準決勝 六甲3-2 小野
- 決勝 六甲0-0 伊丹北

当大会では市の準決勝でも現在Jリーグのガンバ大阪でプレーされている永島選手ひきいる御影工業を2-0で破るなどして、県大会決勝までほとんど危なげなく勝ち進むことができた。しかし、県の決勝ではG K石末(現在横浜フリューゲルス)を中心とした守りはかたく、延長戦でも決着がつかず両校優勝となった。

県大会に引き続いて、新人戦での他の上位チームとともに和歌山県でおこなわれた近畿大会にのぞんだ。1回戦

シードののち大阪の清風高校と対戦した。このときにはGK本並（現在ガンバ大阪）た威圧されたか、得点することができず0-2で敗退した。結局大会は御影工業の優勝で幕を閉じた。実力的にはわれわれの方がむしろ上回っていたとも思われるのだが、客観的にはどうであれ勝ったものが強いのであり、ここ一番での底力のちがいをみせつけられた思いがしたものである。

【エピソード1—テレビ初出演—】

市大会で優勝したあとわれわれはチームとしてテレビ出演を果たした。それというのも朝日放送の“おはよう朝日です”のスタッフに六甲OBの方がおられ、神戸市1位ということもあって、釜本邦茂氏（当時ヤンマーディーゼル監督、現在ガンバ大阪監督）の指導を受ける生徒役として出させていだいたのである。当時はビデオがそれほど普及していなかったので今ではその映像を見ることもできないとおもわれるが、万一残っていたとしても見たいとは思わない。なぜなら、そのころスポーツコーナーを担当されていたプロ野球解説者花井悠氏に、「世界の釜本にくらべたらあんたらは鼻くそみた

いなもんや」と番組中にコケにされたからである。しかし、出演記念にもらった番組のタオルは12年たった今でもありがたく使わせていただいている。

【エピソード2—堤康国体優勝—】

“エピソード”ではないかもしれないが、堤康（前出）は高3の時に県選抜にえらばれ、秋におこなわれた島根国体で優勝した。高3の秋といえば他の者は目前に迫った受験で頭がいっぱいの時であるから、余りにもかけ離れた話である。その時のことをかれはこう振り返っている。

「タッチライン際を走るだけしか能のない私でしたが、幸運にも兵庫県選抜チームに選ばれ、島根国体に出場することができました。現在、Jリーグのガンバ大阪でプレーしている永島・和田たちを中心にチーム全員が選抜チームとしては稀なくらいによくまとまり、結局、決勝戦で静岡と引き分け、両チーム優勝ということになりました。

もちろん、私といえば、中盤から出されたボールを馬車馬のごとく追いかけ、ひたすらタッチライン際を走っていただけであり、試合内容などほとん

ど覚えていません。

ともあれ、サッカーしか生きがいかなかった当時の私にとって、出来過ぎの素晴らしい思い出を与えてもらい本当に感謝です」

そういえば、先に紹介したテレビ出演のときにあらかじめだれがどういった質問を釜本氏にするかスタッフの方と打ち合わせをしたのだが、その際皆が尻込みするなかでまさきに「ぼくがやります」と手をあげたのはかれだった。「サッカーしか生きがいのなかった」かれはまさに“40期の魂”であったのだが、結構いちびりなのである。

以上40期について述べてきたが、このような限られたスペースの中では当然触れることができなかつたことも多い。たださいごに付け加えておきたいことは、卒業から十数年をへた今でも初蹴りには常時半数以上の者が参加していることからわかるように、われわれはサッカー部時代を共通の良い思い出とする仲間でありつづけているということである。

【加藤 慶一郎】



1981年サッカーダイジェスト5月号

